

今週の為替相場見通し(2024年10月28日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ	
		注	レンジ	終値		
米ドル	(円)		149.09 ~ 153.19	152.33	151.50 ~ 154.50	
ユーロ	(ドル)		1.0761 ~ 1.0871	1.0797	1.0700 ~ 1.0850	
(1ユーロ=)	(円)		162.06 ~ 165.00	164.35	163.00 ~ 167.50	
英ポンド	(ドル)		1.2908 ~ 1.3058	1.2961	1.2850 ~ 1.3150	
(1英ポンド=)	(円)	*	194.57 ~ 198.44	197.40	194.00 ~ 200.00	
豪ドル	(ドル)		0.6601 ~ 0.6722	0.6605	0.6500 ~ 0.6700	
(1豪ドル=)	(円)	*	99.95 ~ 101.69	100.59	100.00 ~ 103.00	

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第一チーム 山田 隆広

(1)今週の予想レンジ: 151.50 ～ 154.50 円

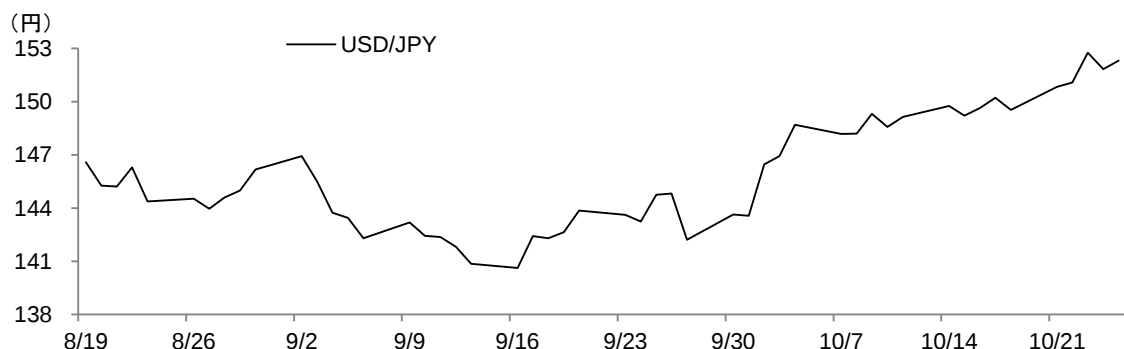
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は堅調に推移。トランプ氏の米大統領再任観測の高まりなどから米金利のイールドカーブがベアスティープ化、ドル高基調となった。週初21日、149.61円でオープンしたドル/円は、先週金曜日の流れを引き継ぎ週安値となる149.09円まで続落。値を戻しつつ海外時間に渡ると、米金利の大幅上昇に追随し150円台後半まで反発。22日、ドル/円は151円近辺でのみ合いが続いた後、海外時間には、米金利の高止まりを受け徐々に下値を切り上げて151円台に乗せた。23日、ドル/円はオープン後まもなく151.37円近辺の200日移動平均線を上抜けると、米金利上昇も相まって大幅に上昇。海外時間に週高値となる153.19円まで急伸も、その後152円半ばに反落。24日、午前中の加藤財務相による円安けん制発言を契機に、ドル/円は軟調に推移。海外時間では堅調な米経済指標などを背景に一時反発も、米金利が低下したことなどで152円を割り込んだ。25日、朝方に日米高官が為替市場について会談を実施したことが伝わるも影響は限定的で、ドル/円は151円後半で方向感なく推移。海外時間でも材料難のなか目立った動きなく、結局152.33円でクローズし越週。

今週のドル/円は円安基調が継続すると予想。来週11月5日(火)に米大統領選挙を控え、今週半ばまでにポジションを手仕舞う動きが意識されるところ、月末の実需フローも重なりボラティルな展開となることには警戒が必要か。もともと、注目の本邦衆議院選挙は自公過半数割れとなり、政局への不透明感が高まる中、円高方向への動意は薄からう。今週は30日(水)～31日(木)にかけて日銀金融政策決定会合が控えているが、今回は政策金利据え置きがほぼ確実視されている。同時発表の展望レポートにおいても、先週公表の東京都都区部10月CPIの結果など踏まえれば、年内利上げを示唆するまでの修正が行われるとは考えにくく、早期の日米金利差縮小を意識した円買いも生じにくいとみる。週後半にかけては、30日(水)に米7～9月期GDP(速報)、11月1日(金)に米10月雇用統計並びに米10月ISM製造業景況指数など重要経済指標の発表が続く。特に米10月雇用統計は、失業率4.1%、非農業部門雇用者数が前月比+11万人の増加を見込むも、ハリケーンやストライキなど特殊な下押し要因の影響が未知数。多少弱含んだとしても11月FOMCでの大幅利下げ観測は高まらなるとみるが、既にブラックアウト期間でFed高官による発言が抑制されていることから、結果の強弱に一喜一憂しドルのボラティリティが急激に高まるリスクも考慮に入れておきたい。

(3)先週末までの相場の推移

先週(10/21～10/25)の値動き: 安値 149.09 円 高値 153.19 円 終値 152.33 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 南野 光喜

(1) 今週の予想レンジ: 1.0700 ~ 1.0850 163.00 ~ 167.50 円

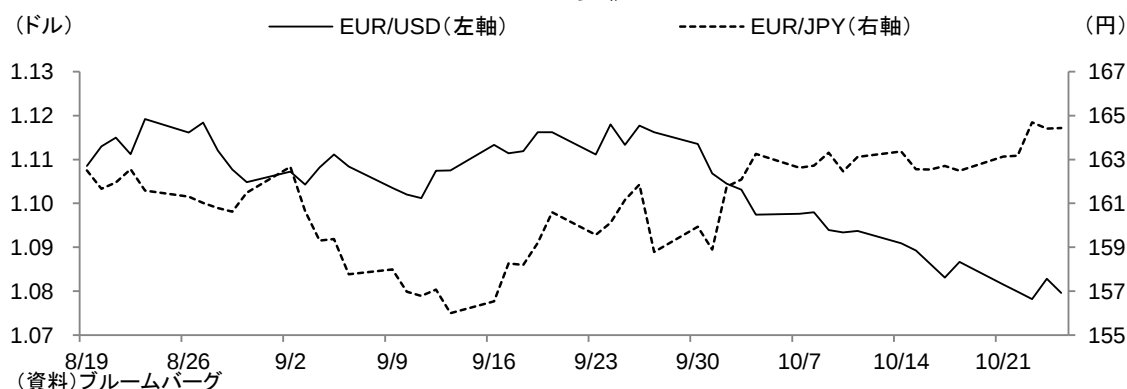
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは軟調推移した。週初21日、1.0868でオープンしたユーロ/ドルは特段の材料がない中動意に欠ける展開。米国時間に入ると、ローガン・ダラス連銀総裁の「利下げは慎重なペースで実施を」等との発言を受け、米金利が一段と上昇する中で1.08台前半まで値を下げた。22日は続落。ラガルドECB総裁のハト派発言を受け、ユーロ売りが優勢となり、1.08ちょうど付近まで下落。その後も米金利上昇を背景にドル買いの流れが継続し1.07台後半まで下落。23日は特段の材料がない中、独金利の低下が重しとなり、じり安推移。週安値となる1.0761まで値を下げるも、その後はドル買い一巡となった事から、1.07台後半まで戻した。24日は水準を1.08台まで切り上げる展開。オープン直後はユーロ売りがやや優勢となったが、独10月製造業PMIと非製造業PMIがいずれも市場予想を上振れ、上昇推移。米金利が低下する中で、1.08台まで持ち直した。25日は上値重く推移。独10月IFO企業景況感指数が市場予想を上振れ1.08台半ばまで上昇するも、米金利上昇を背景にその後はドル買い優勢の展開。結局1.08台を維持できずに1.0797で越週した。

今週のユーロ/ドルは上値の重い展開を予想。茲許、複数のECBメンバーから追加利下げを示唆するハト派的な発言が見られる。特にラガルドECB総裁は今後の利下げに関して「動きの方向性は明らかだと思う。慎重ながらも継続していくべきだ」と発言しており、追加利下げについて前向きなやや踏み込んだ内容を示した。市場では次回12月会合での▲50bpの利下げを織り込み始めているため、ユーロが買われる展開は想定しづらく、上値重く推移する可能性が高そうだ。今後は利下げ幅が焦点になってきそうだが、「データ次第」とラガルドECB総裁は強調していただけに30日(水)ユーロ圏7~9月期GDP(速報)や31日(木)ユーロ圏10月CPI(速報)の内容には注目したい。米国サイドに目を向けると、11月5日(火)に投開票日を迎える米大統領選挙に注目が集まるだろう。現状、拮抗しながらもややトランプ氏優勢との見方もあるため、同氏が当選した場合に備える「トランプトレード」が意識され、ドル買いの流れが続くだろう。また、週末には米10月雇用統計の結果が発表される。ハリケーンの影響を受け市場予想よりも弱含む可能性もあるが、一時的な要因として市場で解釈され、ドル売りは限定的と考える。その他今週の主な経済指標としては29日(火)10月コンファレンスボード消費者信頼感指数、30日(水)独7~9月期GDP(速報)、独10月CPI(速報)、31日(木)米9月PCE価格指数などの公表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/21~10/25)の値動き: (対ドル) 安値 1.0761 高値 1.0871 終値 1.0797
(対円) 安値 162.06 高値 165.00 終値 164.35



3. 英ポンド

欧州資金部 神田 史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.2850 ~ 1.3150 194.00 ~ 200.00 円

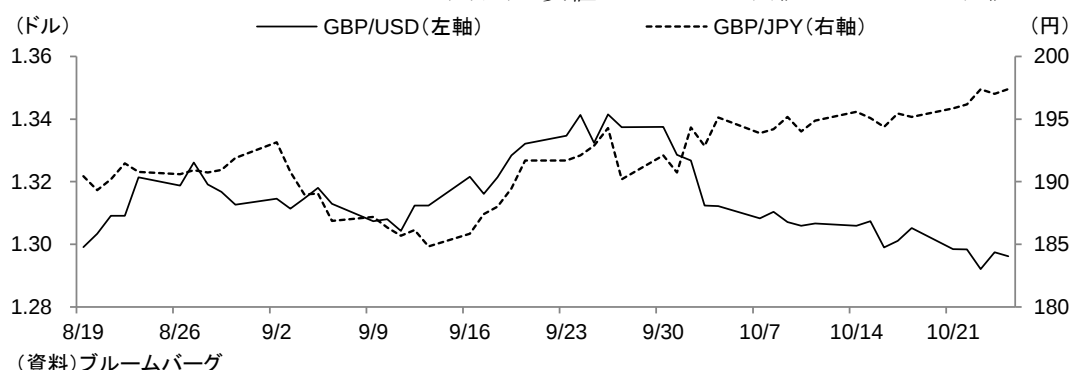
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、上値重い推移。週初21日は1.30台半ばで取引を開始。週末の中東情勢を受けたドル買い・原油買い・金買いで始まる。NY時間に11月米利下げ観測が後退しドル買いで1.30を割り込む。22日、23日も引き続きドル堅調で1.29台前半まで下落。24日は英10月製造業/サービス業PMIは予想対比弱かったものの、独10月PMIが予想外に上昇しユーロが強含むのに英ポンドも連れ高となり1.29台後半まで値を戻す。25日は若干買い戻され1.29台半ばで週末を迎えた。対円では上昇。週初195円レベルで取引を開始。米金利の据え置き観測の高まりでドル/円が上昇し23日には一時153円台を記録し、英ポンドも対円で7月以来の198円台を記録。しかし、日本当局の牽制発言も見られ翌24日には196円台に押される。25日はやや値を戻し197円台で週末を迎えた。

今週の英ポンド相場は、引き続き上値重い展開を予想。英国において一番の注目は30日(水)の英予算案の発表。政権が保守党から労働党に替わって初の予算案となる中、マニフェスト実現に向けた財源の確保をどうするのかに耳目が集まっており、かねてからスターマー英首相は「痛みを伴う」内容になることをほのめかしている。内容が英消費者のセンチメントを悪化させる場合も、財源確保が不透明で英国債の下落を促す場合も、英ポンドには重しとなると見ており上昇シナリオを描きにくい。また11月1日(金)の米10月雇用統計も注目。FOMC前の指標であり方向を決定付けるとは見ていないが、11月のFed利下げ織り込み度(執筆時点で9割超)に影響を与え上下に振れる展開が予想される。対円では、再び介入観測が出てきたことでボラティリティが増している。オプション市場で観測される1週間のインプライド・ボラティリティは約6円の値幅を想定している模様だ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/21~10/25)の値動き: (対ドル) 安値 1.2908 高値 1.3058 終値 1.2961
(対円) 安値 194.57 高値 198.44 終値 197.40



4. 豪ドル

金融市場部 為替営業第一チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 0.6500 ~ 0.6700 100.00 ~ 103.00 円

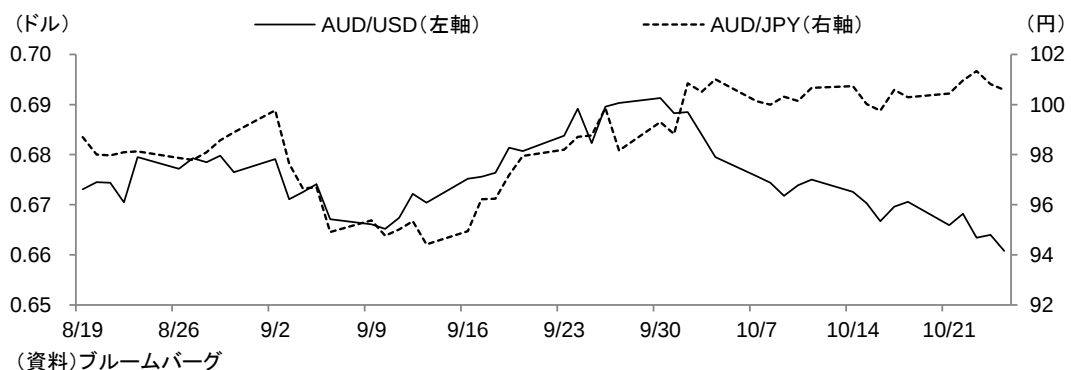
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは米金利の上昇などを背景に弱含んで推移した。週初21日の豪ドルは0.6714で取引開始後、序盤は0.67台前半にて小高く推移。中国が貸出金利指標である5年、1年貸出プライムレートを各▲5bp引き下げるとの発表したが、豪ドル相場への影響は限定的となった。その後、ロンドンオープン頃からドル買いの流れが強まり、豪ドルは下値を追う展開となり、0.66台半ば近辺まで下落して引けた。22日の豪ドルは0.6654で取引開始後、買い戻しの動きが入った。前日の米国債利回りの上昇を受け、豪国債利回りが急上昇する中、豪ドルは買いが優勢となり一時0.6695まで上昇。しかし、NY時間に入り米国債利回りが上昇幅を拡大する動きに伴い、豪ドルは上値を押さえられ0.6683で引けた。23日の豪ドルは0.6682で取引開始後、アジア時間内は狭いレンジでの値動きが続いた。欧米時間にかけて米金利が一段と上昇し、ハイテク株を中心に株価が売り進まれると、豪ドルは下値を追う展開となり一時0.6614まで下落した。NY引けにかけて株価が反発すると、豪ドルも小幅に買い戻され0.6635で引けた。24日の豪ドルは、0.66台前半を中心に小動きな相場展開となった。一時0.66台半ば近辺で推移する場面も見られたが値動きは限定的だった。週末25日は、0.66台前半での推移が継続した。海外時間は再び0.66台半ば近辺まで上昇する場面も見られたが、NY時間終盤にかけてはドル買いが優勢となり0.66近辺まで下値を拡大して取引を終えた。豪ドル/円は、ドル/円の上昇を背景に100円近辺から一時101円台後半まで上昇するなど、週を通じて堅調に推移した。

今週の豪ドルは対ドルでレンジ推移を予想する。具体的には、0.6500~0.6700の水準で方向感に乏しい値動きになるのではないかと。背景としては、米利下げ観測の後退により米金利が上昇する場面では豪ドルが弱含む場面がみられているが、一方で米金利の上昇に豪金利が連れ高となる場面では豪ドルが買い戻される場面も見られており、両国の金利動向に引っ張られる形で一進一退の展開が継続するだろう。また、来週11月5日(火)には米大統領選挙が予定されており、勝負は接戦となっているため、選挙の直前動向によっては相場が大きく振れる可能性があることにも触れておきたい。特に、対円ではドル/円の上昇に連れる形で豪ドル/円の堅調推移が継続しているため、選挙動向を受けた急反落を懸念したい。今週予定の経済指標は、30日(水)豪7~9月期CPI、豪9月CPI、31日(木)豪7~9月期輸入物価/輸出物価指数、豪7~9月期ならびに豪9月小売売上高、11月1日(金)豪7~9月期PPIの発表が予定されている。豪CPIについては、前回比低下が予想されており一時的に豪ドル売りが強まる可能性もあるが、RBAがインフレ抑制を重視し政策金利の据え置きを継続していることから影響は限定的となるのではないかと考えている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/21~10/25)の値動き: (対ドル) 安値 0.6601 高値 0.6722 終値 0.6605
(対円) 安値 99.95 高値 101.69 終値 100.59



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。